

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二二一七三七一番
 編集・発行人 首藤 正義

第一回福音宣教推進全国会議課題

『開かれた教会づくり』

司教団は、全国16教区から寄せられた課題を受けて、
 昨年12月の司教会議で、第一回福音宣教推進全国会議課題を決定し、発表した。

日本のカトリック教会の皆さま

皆さまの熱心な討議の結果ともいふべき第一回福音宣教推進全国会議（以下、第一回国会議と略します）課題案をお送りいただきありがとうございます。

私ども司教団は、12月9日から開催された本年度の臨時司教総会において、これらの課題案をもとに、祈りのうちに討議を重ねました。

私どもは、各教区からの課題案を通して、皆さまが真剣にそれぞれの立場で福音宣教に取り組んでおられることを感じさせられました。これらの課題案はみな日本の教会の福音宣教のために無視できない重要なものばかりでしたが、私たちは、これらの根底にある共通の問題を確認いたしました。それは、福音宣教の実践に際して、カトリック信者としての私たちが自身の生活と信仰の遊離、そして、

教会の日本社会からの遊離でした。

そこで、司教団としては、福音宣教を考えるに当って、生活から信仰を見直していく方向、日本の社会の現実から福音宣教の在り方を考えていく方向を選びました。

こうして、私たちは、第一回全国会議の課題を「開かれた教会づくり」としました。

どこか遠いところで作られた信仰様式に生活をむりやり合わせる努力をするというのではなく、生活と日本社会を見つめながら、信仰の態度を改め、それを育て、証したいと願ったからです。それは、けつして、現実に迎合したり、妥協したりすることを目指すからではなく、生活の中でキリストの十字架と復活の神祕を真剣に生きることこそ福音宣教の源泉だからであります。

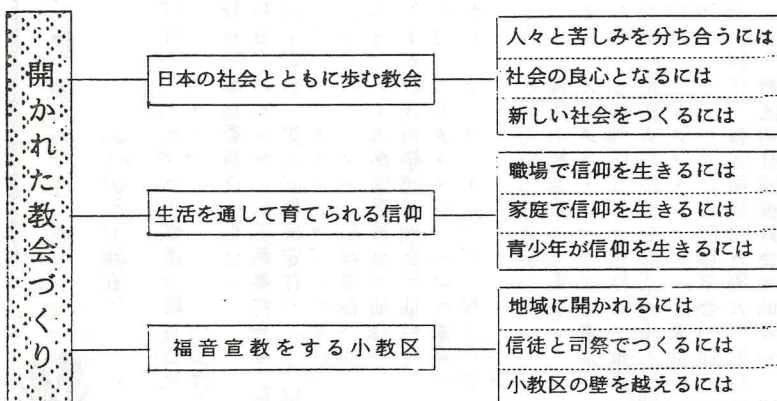
課題の中に掲げた三つの柱は、どれも、私

たちが、もう一度、具体的に生活の中に信仰を育てながら、福音宣教に向かうことを目指しています。

これからあと一年足らずに迫った全国会議のために、この課題をもとに、研究、討議、実践を進めてくださることをお願いいたします。

一九八六年12月12日

日本カトリック司教団



「カテドラル建設」の話し合いを

―岩手地区―

昨年11月9日、岩手地区信徒連絡会代表者会議(第26回)が岩手カトリックセンターで開かれた。

その中でカテドラル問題もとりあげられ、建築促進の立場から以下のような意見が出された。「今から資金の準備をしなければ間に合わない」「岩手としては賛成のしるしとして資金の積み立てをしたらどうか」「小教区毎の話し合いを始めたかどうか」「小教区意見を踏まえ「次回評議会には具体的に提起されると思うので、具体的なとりくみはそれからにしたい。小教区での話し合いをすすめてほしい」と石川会長がまとめ、了承された。

△召命練成会 V
招きに 耳を傾けて！

去る2月10、11日、東仙台教会とオタワ愛徳修道女会修道院を会場に召命練成会が開かれた。男女10人の参加者があった。梅津明生師、Srリーズ・ラミの二人が責任者となり、東仙台教会の5人の信徒の方が食事等の世話をして下さった。

青年が自分の道を考えるため、結婚、独身、修道者、司祭のそれぞれの立場から話しがなされた。

大内 千佳

「自分の道」を模索している人々と、共に作業を行い、分かち合っただけ感じたことは、自

分自身のことであるにもかかわらず、質問に対して思うように筆が進まず、これからの道を求める前に、先ず現在の自分についてよく知ることがある、ということでした。また、それぞれの道を現在歩んでいる方の話しには強く感動しました。一つの道を歩んでいくには、はかり知れない苦しみもあったと思えますが、一人ひとりが輝いて見えました。これから、私自身もいろいろな経験、出会いがあると思えますが、その時々「招きに耳を傾けて」いけるように余裕を持ち、神さまとゆっくり対話していけたら：：と思えました。

田中 丈夫

司祭への道を目ざしたい。そう申し出てから、余りにも事の重大さに、口では頑張るぞと強がるものの、不安の中で大きく揺れ動いていました。そんな中で大きく揺れ動いていました。そんな中で大きく揺れ動いていました。感謝のうちに、イエズス様に向かう私の気持ちの確かさを感じとつたように思います。

長井 和子

エマオへ向かう二人の旅人は、横に並んで一緒に歩き話しているお方がイエズスとは気がつかなかったように、私たちが人生を歩いている時にも、神のみことばも聞えず、又横を歩いておられる方が見えないこともしばしばあります。神との出会いを具体的に体験した喜び、それが信仰生活を生きる力(恵み)となつて逆境の時にも喜びと感謝をもつて生きていきます。うれしい時、又迷いながら、落ち込み、苦しい事：：それらを受け入れて歩んだ生活の積み重ね、現在の私という存在の

司教様の日程

(1月30日現在)



- 1月17日 ドミニコ女子修道会総長会見 (仙台)
 - 18日 墓地委員会(仙台)
 - 19日 スベルマン病院新築打合せ(仙台)
 - 20、22日 第三回難民定住セミナー(横浜)
 - 22日 カリタス・ジャパン(東京)
 - 23日 スベルマン病院理事会(仙台)
 - 24日 ナイス準備委員会(仙台)
 - 26、27日 教区司祭団月例会(仙台)
 - 30日 カリタス・ジャパン(東京)
 - 31日 カリタス・ジャパン理念小委員会(東京)
 - 2月2日 教区司祭団役員会(仙台)
 - 5日 常任司教委員会(東京)
 - 6日 カリタス・ジャパン(東京)
 - 15日 仙塩地区壮年連盟総会(仙台)
 - 18日 宗法責任役員会、学法理事会(仙台)
 - 19日 カリタス・ジャパン(東京)
 - 20日 スベルマン病院理事会(仙台)
 - 23、24日 教区司祭団月例会(仙台)
 - 3月2日 教区司祭団役員会(仙台)
 - 5日 常任司教委員会(東京)
 - 6日 カリタス・ジャパン(東京)
- 2月25、3月1日の間に盛岡ドミニカンの訪問を行なう。
- すべてが準備されたものであり、恵みであることを年を経ると共に深く悟られます。今回、若者たちの練成会に共に参加し、お手伝いが出来たことに感謝します。

教会共同体は家庭から

四ツ家教会 日置 孝次郎

昭和61年9月に行なわれた教区大会の中心の課題に、「家庭のあり方」がありました。残念ながら家庭とその土台をなす夫婦の関係、親子のかかわりについて突っ込んだ分かち合いをするには、時間的余裕も、また心の準備も乏しかったようです。そもそも、秘跡により「二人が一人のひと」になる程の高みを目指すよう促されている夫婦の内奥的な交りと、直接それに結びつく親密な親子関係を、あのような大会で話合うことが無理なのかもしれません。

四ツ家教会では、2年前から、共同体としての教会作りを目指して、ラベル修士の熱心なご指導による練成会を開くなどして努めており、そのためにはあらゆる教会の行事の一貫した理念として、「教会共同体」をキャッチフレーズとして掲げております。しかし、教会共同体とは、理想的には一つの家庭、1家族のようなものだとなると、先ず、一つ一つの家庭が本当にキリストが望まれるようになることが必要です。そしてそれを目指す家族が日曜日毎に共に心を同じくして集まる時、生きた共同体の家族にはじめてなりうると思われまます。そして神が望まれる家族には、「二人が一人のひと」になる程に完全な一致を目指して歩む夫婦がまず土台とならなければならぬように思います。

8年前から岩手では、盛岡を中心に夫婦のあり方への実践的内省のために、マリッジ・エンカウンター（結婚の出会い）の集い（2泊3日）が数回行なわれてきました。これは、組織とか運動を目指すのではなく、結局は、婚姻の秘跡が実際に生かされる（日常の小さな出来事の中で）二人の現実の姿を問題とするのです。考えてみますと、夫婦は神の創造の御業を委ねられたものであり、それだけに、秘跡によつて高められねばならないと思います。不幸にも、「家庭内離婚」は現実によく夫婦間に広がっており、信者の家庭も決して例外ではありません。真の通じ合いを目指さない夫婦は病み、家庭は窒息の状態に陥ります。そこからの脱出には離婚しかありません。また、夫婦以上に苦しむのが子供です。なぜなら子供が親に望む最上の贈物は、「お父さんとお母さんが心から仲良くしてくれること」と言われるからです。分裂した夫婦、惨めな子供を抱えた家庭が集まっても、キリストの共同体は実現不可能ではないでしょうか。

マリッジ・エンカウンターへおさそい

4月10日（12日）（金曜の夕方から日曜の午後まで）、盛岡市志家のベトレヘム宣教会本部で、桐生フランシスコ会ダナン神父様を迎え、エンカウンターが行なわれます。この夫婦のための「心のドック」に入られる方は大歓迎です。詳細は四ツ家教会ヨセフ神父にお問合せください。

Tel 〇一九六一五四一〇五五七

高校生会・冬期合宿……………
神様 ありがとう

会津若松教会 佐藤 すみ子……………



1月6日〜8日、磐梯町のドミニコ会、雪の聖母修道院において、高校生会「はつぱくらぶ」の2回目の合宿を行いました。今回は、いわきの高校生も参加してくださり、いっそう楽しい合宿になりました。

6つのテーマ「自分は誰?」「どんな生き方をしたい?」「何が大切?」「通じてる?」「信じてる?」「愛してる?」について、自分自身を見つめ、考え、それをみんなで分かち合いました。

最初はそれぞれが不安を抱きながら参加したのですが、分かち合っていくうちに、「神様の存在」と「神様のお導き」によつてこの合宿に参加したのだ」ということを実感することができて、不安は「喜び」へと変わっていきましました。

合宿を終えて別れる時、「ありがとう」と握手を交し合いました。本当に充実した、あたたかい合宿でした。神様、ありがとう!

島田 実 神父 帰天

去る12月27日、フランシスコ・ザベリオ島田実師は動脈 および老衰のためスベルマン病院で帰天、84歳。仙台教区の最長老で、一九〇二年、北海道生れ。一九二九年司祭叙階。翌30年にローマ・ウルバノ大学卒業。教区内各教会を歴任。司教総代理の重職を3回にわたつて勤めあげた。

追悼

島田 実神父様の

思い出



元寺小路教会 早坂 養吉

函館教区時代から仙台教区時代に至るまでの最も古い、且つ、近代感覚を備えられた類少ない神父様であつたように思う。私事にわたつて恐縮であるが、伯父である故ヤヌアリウス早坂久之助司教が日本人として最初の司教に選ばれて、一九二七年十月三十日、ピオ十一世教皇様からたつた一人で司祭から司教に叙階されたとき、島田神父様は当時神学生であつたが、日本人であつたが故に特別の席を与えられたとお聞きしている。司祭になられて、海老神父様と共に帰国されたのはその一、二年後であつた。

57年間という長い司祭生活を通して多くの人々、特に信者でない方々からも慕われた神父様の御性格は、視野の広さと寛容さと、そして、情けの神父様々と言われたその親しみやすさによく現れていたと思う。だが初対面の時は必ずしもそうは感ぜず、目のぎよろつとした、とつきにくい神父様というファーストインプレッションを持たれた方も多い事と思う。しかし深く接すれば接するほど、人間味豊かな暖か味のあるお人柄であつた。故人となられた小野忠亮神父様が島田神父様を評して、「世話好きの親分肌」でこの人なら信頼感が湧いてくる、と書いておられたが、ま

ことにその通りのお人柄であつた。電話をかけるのがお好きで、又いちばやくガチャンとお切りになるのもまた名人芸の域に達しておられたように思うことしばしばであつた。又神父様は、どんな人とも食事を共にされるのがお好きであつた。昔ならつた「フランクチャオ・パーニス」を思い出すことであつた。特に若い人々を集め活気づけ、神への信仰に向けていくための特別なお力をおもちのよう、青年姉妹も又、神父様を囲んで話したり飲んだり食べたりするのを望んでいた。「ソラソラ食べなさいよ」とおっしゃつては御馳走してくれたものであつた。又、神父様は気前がいいというか寛大というか、大事な物や良い物があると、すぐに人に上げてしまわれた。そのような神父様であつたから、函館元町教会でも豊屋丁教会でも八戸の教会でも元寺の教会でも、八戸の塩町教会附属のイメルダ幼稚園の父兄達が、「イメルダを愛する会」即ち「島田神父様を囲む会」を作つて去られた後の神父様を慕つており、それは今だにつづいている。

前述した通り島田神父様と早坂家は大正のはじめから御縁があつて親戚づきあひをしていただいたお陰で、私共の仲人もしていただき感謝申上げてゐる。病を得て長崎教区長を辞し、夏休みに長崎から郷里仙台に避暑にきていた久之助司教は、特に神父様を弟のように可愛いがられ、「実を呼べ」と言つては告白をすませ、その後、好きな中トロのまぐろで共に飲み、共に語るその御様子はそばで見

ていた私も羨ましい程の先輩後輩の間柄であつた。横綱ずしにお共したのもその回数から言ふと私が最多数であつたようだ。

マリア様に対する信心は又格別で、いつの日か又、君と一緒にルルドに行きたいな、と普段からもらされていたのにと残念でならない。お説教の準備にも本当に力を入れておられ、元寺においでの際は第一、第二助任とお三人の神父様で三週間一度の交代で、日曜には朝から晩まで一人でなさつておられた。

昭和20年7月10日、私共一家が疎開（白石の在の七ヶ宿）する前夜ボタモチパーティーを開いていたとき警戒警報が鳴り、それに続く空襲で仙台の街が灰燼に帰したのであつたが、そのような戦時中、抑留されたカナダ人修道女達のもとに、憲兵の目をぬすんでひそかに差し入れをしたのも人情神父のおもかげをしるのばせるのに十分である。戦時中自家製のドブコクを私の父と二人で酌みかわし、大いに意気をあげられていたのも思えば過去のことになつてしまつた。

病を得てスベルマン病院に入院されてからは、土・日の泊りの時には、私は自分の給食の膳を運んで神父様と共に食事したのも、みんな過去の楽しくもあり寂しくもある思い出になつてしまつた。私のようなものを息子のようになつて可愛いがつて下さつた神父様とも、もうこの世ではお会い出来なくなつたが、いつの日か天国で再びお会い出来ることを確信しながら、しばらく神父様、サヨナラ：。

仙台領内キリシタン史(1)

日本キリシタン史の経緯

Sr 猪岡 庫

仙台領内に最初に足を踏み入れた宣教師はフランシスコ会士ルイス・ソテロ神父であり、それは一六二二年のことであった。彼は江戸で仙台城主伊達政宗の知遇を得て、仙台領内での布教の許可と保護を約束されて、政宗の城下に赴いた。

さて、仙台領内でのキリシタン史を述べる前に、少なくとも、仙台領内開教の頃までの日本キリシタン史の経緯の概略を見たい。日本史的立場に立った上で、地方史である仙台領内キリシタン史もよりよく見えてくると思われるからである。

わが国に、はじめてキリスト教を伝えたのは一五四九年、かの有名なイエズス会士フランシスコ・ザビエルであった。彼は鹿児島、平戸、豊後、山口などにおいて日本宣教の緒を開き、2年後に日本を去った。彼の後継者たちによって、はじめは九州、山口地方に、10年後には都を中心とする五畿内にまで布教活動は進展した。高山右近をはじめ、すぐれたキリシタン大名も多く輩出した。一五六八年に天下を統一した織田信長は、キリシタンに好意的で積極的これを保護し、仏教勢力を抑圧したので教勢は燎原の火の如く広まった。一五八〇年の信徒総数は10万に達したといわれる。九州の三キリシタン大名が、いわゆる天正少年使節を欧州へ派遣したのもこの頃で

であった。

やがて政権は豊臣秀吉の手に移ったが、彼もはじめはキリシタンを大いに優遇した。為政者の保護のもとに前途洋々と見えた教会に、余りにも突発的な宣教師追放令が秀吉によって発せられたのが、一五八七年のことであり、一五九七年にはかの有名な日本二十六聖人殉教者が日本教会史をその鮮血で彩った。保護者から突然の迫害者に転じた秀吉もやがて没し、教会は再びしばしの平和を享受した。

次の実力者徳川家康は、宣教師を優遇するかに見え、九州、五畿内地方はもとより、駿河、江戸にまで教勢は伸び、一六一四年家康がキリシタンの全国的大追放令を出した時の信徒数は50万といわれ、すでに日本人司祭も誕生していた。ザビエルの開教以来、イエズス会宣教師は実に90万人に洗礼を授けたと記録されている。

しかし当時の為政者の宣教師優遇の動機は外国との交易の利益のためであり、戦国の世の大名たちの大部分も又、同じ動機で宣教師に接したと見てよいであろう。幕藩体制の基礎がようやく固まり、もはや宣教師やキリシタン大名との友好関係を必要としなくなった時点で、家康も又迫害者に転じたのであった。為政者たちは、外国通商の利益に宣教師を利用したいと思う反面、絶えず彼らを国土侵略の手先ではないかとの疑いの目で見ていたのである。

他にもいろいろ考えられる迫害の原因について論じる紙面をもたないが、家康は二六二二

年に先ず諸大名、幕臣に禁教令を発し、幕府直轄領内のキリシタンを禁止した。この同じ一六二二年が仙台領内キリシタン史の発年のにあたるのである。

青年の手になる

「市民と共に祝うクリスマス」

昨年(1991年)の12月23日、元寺小路教会の青年たちによって「市民と共に祝うクリスマス」が企画され、300人の参加者があった。

企画のねらいは6つ。①市民にクリスマスの本当の意味を知らせる②キリスト教親派が教会に来れる場の提供③青年たちが教会で普段何をしているかを知らせる④教会に人々の足を向けさせる⑤原理研・統一協会とカトリックとは異なることを知らせる⑥信者と未信者とのつながり

当日300人の参加を得て、企画は成功したものの、いくつかの反省がなされた。老若男女の不定多数の参加者で、対象が絞れなかつたこと。従って参加者にとつてプログラムに関して多少の不満が残ったこと。また、未信者との個人的なつながりを持つことが困難であったこと。

いづれにせよ、一般市民に呼びかければ、人々は教会に足を運んでくれる、という確かな手応えを経験したことである。そして、「何をどのように伝えたいか」ということを自分たちの普段の信仰生活の最大の課題である、と青年たちが自覚したことではないだろうか。

スカウトは

いま

仙台晝屋丁教会



教会を育成団体としてボーイスカウト宮城第二十四団が発隊したのは、昭和30年4月、島田実神父様が主任司祭として着任されて2年目の年である。同年「小さき花幼稚園」が開園している、この年は、本教会が従来より積極的に考えるスタートの年となった。

ボーイスカウトの発隊までは、しかし、長い準備期間をもっている。これより先、昭和24年に着任された児山六七男神父様は、翌25年に開校した聖ウルスラ学院小学校の児童たちについて、特に放課後の活動を通しての健全育成について深く考えておられ、教理指導のかたわら、毎土曜日の午後校庭で一緒に過ごしておられた。そして、最上級生が四年生になったとき、ボーイスカウト指導者の資格をとるため講習会に参加されるという熱意を示された。これに感動した故中西厳氏(当時大学生)も資格を得、二人で発隊準備にとりかかり、他の青年達の協力を得て、六年生となった聖ウルスラ小学校第一回生の男子21名を中心に発隊式をあげたのである。

中西氏のあとを数人の隊長が引継いでいるが、特筆したいのは、昭和42年から19年間にわたって愛弟子の現隊長海藤周重氏に後事を託すまでスカウト一筋に活躍された福原有信氏の

存在である。氏は仙台市職員として多忙な中にありながら、毎日曜日の指導は勿論、日本ジャンボリーや東北大会・県大会に県役員としてまた隊長として毎回スカウトと共にあつた人である。年次休暇はすべてスカウトのために使われたと思うが、物心共に個人としては余りにも多くの犠牲を払われた。何ら報いることが出来ないでいるが、教区の方々に、氏の業績大なることを紹介しておく。

草創期に手伝いをした青年達の中に、青森県のコミッショナーであり県の責任者として活躍中の藤村重実氏がいる。氏が本団の実質上の創始者である児山神父様と共に塩町教会におられるのは奇しき縁とすべきか。

次に、現在の状況について述べると、スカウト8名、リーダー2名で活動している。毎日曜日に集まるのは無理があるので、月一回は休日として自宅で自主プログラムを消化することをを行い、集まった日はどのスカウト隊でも行っているような活動となっている。大祝日にはミサに参列し、共同祈願の一員ともなっている。隊長は代々信徒であるので、それぞれの持味で宗教教育を行ってきた。

本団にとつての悩みは、ここ十年余り、スカウト数が減少傾向にあることで、小学五年生から育ててきたスカウトが中学生になると、クラブ活動や学習塾通いのために出席できず休隊するからである。以前は受験のため一時休隊するが、高校に入ると復帰してリーダーを助ける役割をもつてくれるスカウトが毎年数人はいいたのだが、このごろはめつたに見い

だしえなくなっている。カブスカウトをもつていない本団にとつては、こうした減少を食い止める手だてはリーダーの努力にもかかわらず難しいものとなっている。今は、スカウトたちがたとえやめても「永遠のスカウト」としてそれぞれが健全な生き方をしてくれるものと期待し、祈っている。

一九七〇年代以降、社会全体が低成長期に入つて、明確な目標を大人たちがさがしがくねていることもスカウト人口の減少につながる教育についても思われ、学校外の子供たちの教育について、日曜学校のあり方とともにボーイ・ガールスカウトのあり方について、カトリック教会全体での相互研修が必要なのではないかと思うこのごろである。

(団委員長 佐藤英樹)

教育講演会

テーマ 「現代の忘れもの」

講師 ノートルダム清心女子大学

学長 Sr渡辺 和子

とき 4月19日(日)午後2時半〜4時

ところ 仙台市民会館大ホール・入場無料

責任者 仙台元寺小路教会 早坂 養吉



【編集後記】

今、日本は、「売上げ税」「エイズ」の問題が連日新聞紙上をにぎわしている。その影にかくれて「国家秘密法」が上程されようとしている。いづれも大きな問題であるが、「国家秘密法」は言論に関わる者のみならず、すべての人が大いに目を光らせなければならぬものである。「いつか来た道」を再び歩ませないために。(首)